を戒められしが、雪月の爲には、かゝる物をさへ備られし事、いと貴とからずや、

〔大館常興日記〕天文十一年四月五日、小屏風、（馬の繪、こまいぶやう也、）長谷川かたより來也、

〔槐記〕享保十三年五月三日、風爐先ノ小屏風ハ、必ズ立ルコトニアラズ、壁モナク兩方トモニフスマナドノ處ニハ、小屏風ナケレバシマラヌモノ也、又風爐ヲ前エ引出シテ飾レバ、尙以テ入ラヌ也、（略下）

〔視聽草七集二〕文政五年壬午三月、大君（德川家齊）五十御年滿御祝儀として、仙洞より御小屏風一雙を被進、紺地泥畫の根引松に折枝竹を、土佐光孚が筆にて、五色（青、黃、赤、薄紅、薄紫、）の小色紙に、左之和歌ども、花山院（江愛德）一筆に書しめ給ひしよし、或人其歌を寫し置けるを借てこゝに寫す、（略歌）

〔著作堂一夕話中〕烟花城書畫展覽の目錄

寛政十二年九月廿五日、東山雙林寺において展覽する所の烟花書畫の目錄、京師の友人より借抄す、左の如し、（略中）

屏風三品

一和州家隆兩筆腰屏風　賀樂狂夫所藏

〔古今著聞集八好色〕御室（覺性法親王）御寢所を御覽じければ、紅のうすやうのかさなりたるをひきやりて、歌かきて、御枕屏風にをしつけて有たりける、

〔山堂肆考三十七器用〕敬夫枕屏

邵康節過友人家、晝臥、見其枕屏畫小兒、題詩其上云、遂令高臥人、欹枕看兒戲、

〔茶道早合點下〕風爐先屏風

兩面二枚屏風なり、長さ二尺ばかり、はゞいろ〳〵有、紙張又はあじろ等有、流義によりて品多し、

〔運歩色葉集久〕畫屏